

地図の銅版印刷（『陸地測量部写真帖』）

Newsletter of the Kanagawa Prefectural
Museum of Cultural History

神奈川県立歴史博物館



MAY, 2022 Vol.28 **だより** No.1

- “Homo sapiens” 一地図を作り、地図を使う人・・・2
- 鈴木藤助日記概説 一部資料の修復報告を兼ねて・・・6
- THE けんぱく PUNCH 館長のお仕事とは？・・・8

“Homo mapiens” —地図を作り、地図を使う人—

人類と地図

人類は様々な方法で世界の姿を捉え、表現してきました。その営みを記録するのが、地図です。日本では、江戸時代に木版刷りの地図が広く流通するようになり、明治時代以降は銅版印刷をはじめとする技術の展開を受けて地図の表現が多様化しました。今日ではインターネットを通じて世界に発信されるデジタルマップが人々の生活に不可欠なものになっています。当館では2022年7月から9月にかけて、主に近現代の「紙の地図」に焦点を当て、地図を作り、地図を使う人たちの活動に迫る特別展「地図最前線—紙の地図からデジタルマップへ—」を開催します。本稿では開幕に先駆けて、企画の意図を紹介します。

ところで、地図とは何でしょうか。現在、皆さんが地図という言葉から思い起こすのは、どのようなものでしょうか。あるいは、皆さんが最近触れた地図は、どのようなものでしょうか。それは、モニターやスマートフォンの画面に映し出されたデジタルマップかもしれません。現代社会の最新技術によって作られたデジタルマップは、まさに最前線の地図です。一方で、人類は長らく紙の地図を作り、使ってきました。本展では、地図を「人類が世界を捉え、ある一定のルールに従って表現したもの」と定義します。画面に映されたデジタルマップも地図ですし、紙に印刷されたものも、また然りです。情報の正確さは問わず、絵画的な表現による絵図も、現実世界ではなく想像上の世界を対象とするものも地図として扱います。これらの地図は、現代のデジタルマップがそうであるように、各時代の

最先端技術によって生み出されたものです。「地図最前線」と題した本展では、各時代の最前線で作られ、使われた地図に重点を置きながら、現代社会における最前線の地図も紹介します。

“Homo mapiens”

地図を眺めるのは、楽しいものです。地図を目の前にして細かな地名や地形を読み込んでいくと、あっという間に時間が経ってしまいます。本展では、そのような楽しみの源を作る存在にも目を向けてみたいと思います。すなわち、地図を作る人たちです。地図を目の前にした私たちが感じる楽しさの根源は、人類の特性に関わるものではないでしょうか。人類が他の生きものと異なる点のひとつとして、自らが在る世界を自ら作り出しうる能力が挙げられるでしょう。春の小川に生きるメダカや、小川の岸辺に咲くスミレにとって、自らが生存できる環境は定まっています。ところが人類は地球上のあらゆる場所に住みます。さらに、その活動範囲は宇宙空間や、コンピュータネットワーク上に構築されたサイバー空間へと拡張しています。人類が、ある環境下だけに生息する動物であったのであれば、自らの世界を広げる際の手がかりとしての地図は必要なかったかもしれません。居所が特定の条件によって定められているならば、それ以外の環境に住処を求める必要はないためです。

このように考えると、人類は地図を操るという点で、他の動物と区別できるのかもしれませんが。そこで本展では、地図を作り、地図を使う人を“Homo mapiens”と名付けました。もちろん、ヒトの学名



Homo sapiens に因んだものです。地図を作り、地図を使う人、といったときに思い起こされる人物として、伊能忠敬が挙げられるでしょう。確かに伊能忠敬の業績は確固たるものです。しかし、“*Homo sapiens*”は伊能忠敬だけではありません。本展では、これまで十分に知られていなかった“*Homo sapiens*”に焦点を当ててみたいと考えています。

地図を刷る、地図を描く

はじめに、地図を作る人のうち、特に注目したい親子を取り上げます。地図印刷技術の転換期にあたる19世紀末から20世紀初頭に活躍した岩橋教章いわはしのりあきと岩橋章山しょうざんの親子です⁽¹⁾。父の教章【図1】は、1835（天保6）年に伊勢で生まれると、後に江戸で狩野派に学びました。幕末には、幕府の沿岸測量に携わって「地図においては比類なき者」と高く評価されています。さらに、教章は1873（明治6）年にウィーン万博へ派遣されて銅石版技術と地図学を習得すると、帰国後は主に内務省地理局という国の機関で地図の印刷事業に取組みました。教章の代表作の一つとして、地図記号のカタログ（凡例集）である『測絵図譜』（1878年、1881年刊）が挙げられます。この『測絵図譜』は、「地上の真形」すなわち山脈の起伏や溪谷の凹凸といった様々な地表面の状況を一目で見やすく、しかも生き活きと地図上に表現しようとする意図のもとで発行されたものでした。その意図を実践したのが、『横浜実測図』（1881年刊、【図2】）といった大縮尺都市図です。教章の息子である章山もまた、印刷技術者として内務省地理局や参謀本部、陸地測量部の事業に携わっています。さらに、1899（明治32）年からは台湾総督府事務嘱託や台湾日日新報社技術員として、台湾と日本を行き来しながら印刷技術の開発に取組みました。本展では、当館が収蔵している岩橋親子に関する資料⁽²⁾などを通

じて、当時最新の印刷技術を駆使した人たちの動向に迫ります。

続いて取り上げたい人物が、吉田初三郎です。吉田初三郎は、大正から昭和にかけて各地で鳥瞰図を描き、一世を風靡しました。鳥瞰図とは、鳥の目で地表面を斜めに見下ろしたようにして表現した図を指します。当館には、この吉田初三郎が1932（昭和7）年に描いた「神奈川県鳥瞰図」【図3】があります。本図は、神奈川県観光連合会という団体が吉田初三郎に依頼し



【図1】 岩橋教章（『正智遺稿』、当館所蔵）



【図2】 『横浜実測図』部分（個人所蔵）



【図3】 「神奈川県鳥瞰図」（当館所蔵）

たものであり、全長約4.2メートルの画面には鎌倉や箱根をはじめとする神奈川県内の観光名所などが細かく描き込まれています。丹念に読み込めば、1923（大正12）年の関東大震災から復興を遂げつつあった昭和はじめにおける神奈川県の様子がつぶさに理解できます。「神奈川県鳥瞰図」が完成した翌年の1933（昭和8）年には、同図をもとにした印刷パンフレットの「神奈川県観光図絵」が発行されました。部数は1万2千部に及び、業者を通じて販売されたり、博覧会の来場者に配布されたりして世間に神奈川県魅力を広めました。加えて、このパンフレットは神奈川県道路課や河港課といった部署によって、視察団体などに配布されています。つまり、観光に留まらず、県が推進していた施策の最新状況を広報する目的を果たしていたと理解できます。

なお、岩橋親子は展覧会の前期、吉田初三郎は後期で紹介しします。前後期ともにご覧いただければ何よりです。

地図を作り出す最前線

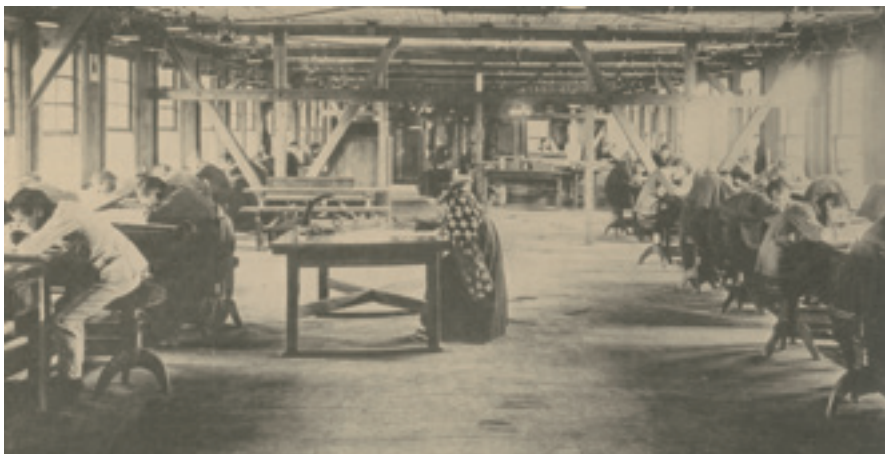
地図を作るためには、いくつもの工程が必要であり、多くの人たちが関わっています。それらの人々の全てが、岩橋親子や吉田初三郎のように名前を残したわけではありません。本展では、1枚の地図を作り出す最前線で活躍した多くの人たちの存在にも光を当ててみたいと考えています。そこで、先述した「神奈川県鳥瞰図」と同じく、今から90年前に発行された『陸地測量部写真帖』（1932年刊）を通じて、当時最前線の地図作りの工程を眺めてみましょう。

陸地測量部は、1888（明治21）年に設置された機関であり、1945（昭和20）年に廃止されるまで陸地の測量と地図製作を担いました。この写真帖が発行される少し前の1930（昭和5）年度の地図生産枚数は約350万枚で、1日あたり約1万枚にも及びます。陸地測量部では地形を測量し、得られた情報を図化し、印刷するという流れで地図を作製していました。地図作りといったときに、まず思い浮かぶのが測量でしょう。一口に

測量といっても、高さを測る水準測量、距離を測る三角測量やその基準になる線を測る基線測量【図4】、地形を実測する地形測量があります。測量結果を図面上にまとめた原図をもとに、印刷用の原稿を描く作業を清絵と呼びます【図5】。これに続く印刷の工程では、銅や亜鉛といった金属製の素材を用いて版を作ります。プリンターやコピー機を使えば瞬時に印刷ができる現在、版を作るという作業は馴染みが薄いかも知れません。当時の陸地測量部ではいくつかの方法で製版をしていて、例えば【図6】は銅版彫刻の様子です。作業部屋の窓際には10人ほどの人が机に向かっていきます。机の上には銅版が置かれていて、窓の光が反射するほどに良く磨かれています。この彫刻作業には、鋼針や特殊な器具を使う直刻や打刻、腐蝕薬を用いる蝕刻といった方法がありました。一番手前の人は、打刻のための器具とルーペを持っているようです。これらの作業で版が出来上がると、いよいよ紙の上に印刷をします。印刷にも様々な方法があり、例えばオフセット印刷機【図7】などの大型機械が用いられていました。ここでは一部の工程に触れるに留まりましたが、実に多くの人たちの手を経て地図が生み出されていた様子が分かります。



【図4】 基線測量作業（『陸地測量部写真帖』、当館所蔵）



【図5】 清絵作業（『陸地測量部写真帖』、当館所蔵）



【図6】 銅版彫刻作業（『陸地測量部写真帖』、当館所蔵）



【図6】 部分

最前線の集合体としての博物館

かつて地図は紙であった。いずれ人類がそのように振り返る時代が来るのでしょうか。もちろん、デジタルマップが浸透した現在でも、紙の地図は作られ、使われています。しかし、紙の地図を手にする機会は、年を追うごとに減ってきています。21世紀も四半世紀が過ぎようとする2022年の今日、紙の地図からデジタルマップへの移行期のただ中にあると捉えれば、人類の歴史に不可欠な紙の地図について理解を深める良い機会かもしれません。

地図を作り出してきた最前線の技術について調べていると、あることに気づきました。博物館は、最前線の集合体と捉えられるのではないのでしょうか。博物館という、古いモノを集める場という印象をお持ちの方が多くでしょう。博物館に集められた資料は、2022年の現在からみれば確かに古いモノです。しかし、それらが生み出された時代に立ち戻ってみれば、真新しいモノであったわけです。さらに、その背後にはモノを作り、使った人たちがいます。博物館には、それぞれの時代の最前線が集められている。そのような考えを頭の片隅に置きながら、特別展「地図最前線」を楽しんでいただければ幸いです。

（学芸員・武田 周一郎^{ただ しゅういちろう}）

【註】

(1) 本稿で取り上げる人物については、以下でも触れているためあわせて参照されたい。

武田周一郎「神奈川県立歴史博物館の地図資料—



【図7】 オフセット印刷機（『陸地測量部写真帖』、当館所蔵）

“Homo sapiens”の観点から—『地図情報』40巻3号、2020年

(2) 角田拓朗「橘忠助氏旧蔵美術資料群について」『神奈川県立博物館研究報告 人文科学』37号、2011年。
神奈川県立歴史博物館編・発行『岩橋教章・章山に関する総合的研究』2017年

特別展 地図最前線

—紙の地図からデジタルマップへ—

会期：前期2022年7月16日（土）～8月14日（日）

後期2022年8月16日（火）～9月25日（日）

休館日：毎週月曜日（7月18日、9月19日を除く）

会期中に作品・資料の展示替を行います。

鈴木藤助日記概説 一部資料の修復報告を兼ねて

はじめに

私が初めて日記をつけたのは小学校3年生の時でした。夏休みの宿題で提出したところ先生に褒められたのがうれしくて、そのあと2年間ほど、父が覗き見ていたことを知るまで書き続けました。

本稿でご紹介する「鈴木藤助日記」【図1】は、長尾村鈴木藤助が1853（嘉永6）年からつけはじめた日記です。途中中断した時期もありますが、息子の留五郎に引き継がれて1889（明治22）年1月（旧暦）まで、37年間、58巻（うち4巻分欠、合綴有り、全53冊）にわたって記されました。

武蔵国橘樹郡長尾村は、現在の川崎市多摩区・宮前区にまたがって位置した村です。村は多摩丘陵を境に谷と耕地（河内）の2つに分かれてそれぞれに名主がおり、近世中期以降は幕府代官の支配をうけていました。鈴木藤助は長尾村谷の組頭、年寄役をつとめるかたわら、家業である醤油造、質屋を手掛けており、村内でも中心的な人物でした。

日記は嘉永6年6月朔日から始まります。第1巻の表紙には「唐舟一条御座候」と書かれ、6月3日浦賀に黒船（唐舟）が来航したことを契機に日記を記し始めたことと理解されています。

日記作成の契機を探ることは、日記の性格を知る上でも重要です。近世在方の日記には、名主の日記や農事日記など、家業や村政にかかわる事柄を記録したものが多く残されていますが、藤助の残した日記にはペリ来航や武州一揆等の事件、多摩川の大洪水や安政大地震についても詳しく書かれています。一方で、日記の大半を占める日常の生活については、村方での寄合、家業、講、無尽、冠婚葬祭、旅行などさまざまな事象が記されています。そのなかでも驚かされるのが、藤助の家を訪れた人や、藤助が訪ねた相手など、出会った人に関する記述の多さです。それは同時に書き手である藤助のネットワークが広範囲にわたっていたことを表しています。

黒船来航からみる藤助のネットワーク

まずは日記冒頭の黒船来航の風聞を藤助が得る様子から、藤助を取りまく人々との交流の一端をご紹介します。

黒船来航の風聞を藤助が初めて聞いたのは6月4日



【図1】鈴木家資料「鈴木藤助日記」

のことで、四日市（東京都中央区）での法事のため外出していました。6日に立ち寄った池尻（東京都世田谷区）で用賀村鈴木六之助から黒船4艘の来航と井伊家陣屋の軍備の情報を得て、8日には小麦移送に赴いた鴨居村（横浜市緑区）で神奈川宿人馬役負担の増加の噂を聞いています。10日には、大丸村（稲城市）源太郎が江戸からの帰りに藤助宅へ立ち寄り、諸大名が浦賀や本牧、江戸内海の防備に出立したという話をします。実際に防備の命が下ったのは7日のことで、噂の広まる早さを知ることができます。さらに、12日には幕府の消防組織である定火消に宛てて出された達書の内容までを記録しており、「万一黒船が内海に侵入した際には老中の指示で八代洲河岸火消役が早鐘を用いて防備の大名らに通達するように」という内容まで知ることができます。この日、黒船4艘が1年後の再訪を告げて江戸湾を去りました。

6日に情報を得た相手である用賀村鈴木六之助は大山通沿いで醤油造をおこなっており、のちに横浜開港場本町通り3丁目にも出店した商人でした。醤油造屋寄合として関係があったことが日記の記述からわかりますが、仕事を超えた付き合いがあったと考えられます。溝口（川崎市高津区）周辺は良質な小麦・大豆の産地であり、農間に酒造・醤油造を営む者が多く、江戸醤油問屋とつながりが深い溝口村稲毛屋安左衛門を中心として十五軒組仲間が形成され、在地での小売りや卸、江戸醤油問屋への出荷のほか、炭販売と併せて大名屋敷との取引も行われていました。鈴木家では藤助の先代である治郎右衛門の代からすでに醤油造屋をはじめており、江戸での醤油販売をめぐる稲毛屋とやりとりする様子を日記中から知ることができます。

12日に記された定火消への達書は、藤助の姉の嫁いだ筈（東京都港区）の武士から宿河原村（川崎市多摩区）の出店づてに聞き及んだものでした。実際には

8日に老中牧野備前守から大目付・目付を通じて定火消、町火消へ達がなされています。艦隊が接近し砲撃に及ぶ可能性もあることを示唆したこの内容は、町々に緊迫感をもって受け取られたのでしょう。藤助ら村方が情報を積極的に収集していただけでなく、江戸の親族側からも安全のために情報が発信されたことがわかります。

2冊目の第1巻

日記は一度、安政2年、7巻目の後に中断し、1859(安政6)年から再び「一巻」として書きはじめられます。この4月には神木山等覚院(川崎市宮前区)本堂再建の普請が始まっています。藤助は等覚院とも深い関係を結んでおり、日常的にも法要、村内寄合の場として毎日のように等覚院に足を運んでいました。本堂再建にあたっては、費用の集金・勘定、人員や資材の手配、江戸講の世話をを行うほか、長尾村村役人らと交代で普請の現場監督をつとめ、さらには本堂に格天井を寄進しています。このことが日記再開の契機となったとも考えられるでしょう。

おわりにー寄贈から修繕へ

ここでご紹介できたのは藤助の持つネットワークのほんの一端にすぎません。藤助を中心に、地域的、職務的なつながりがあり、そこに時間軸という変化が加わって、重層的に絡み合っています。これらを少しずつ紐解いていくことが本資料を読み解く醍醐味なのでしょう。

この「鈴木藤助日記」を含む鈴木家文書のご寄贈を当館でうけたのは、2020年9月のことです。鈴木家資料は、1975年以降、神奈川県史編纂事業や、川崎市市民ミュージアムによって調査が行われてきました。特に日記については白石通子氏らによって翻刻が

進められ、活字本全6巻が刊行されました。地域史研究に役立つよう、との大意で進められた翻刻活動の成果によって、「鈴木藤助日記」は在地農村から維新时期を見つめる好資料と評価されています。日記研究の一環としても、地域史、民俗など分野の傍証資料としても、これから研究の発展が期待される資料であるといえます。

ただし、藤助が日記を記してから150年以上が経過し、資料によっては虫喰いによって紙がレース状になり開きにくくなっているものや、湿気をはらんで和紙の繊維がほつれてしまっているもの、綴じ紐が痛んでばらけそうになっているものがあります。2021年度、そのうちの5点について、資料の修復【図2・3】と記録写真のデジタル化を行いました。修復には破損部分に裏から和紙をあてる「繕い」【図4】という方法や、穴に繊維を充填させる「リーフキャストイング」【図5】という方法を用いました。いずれも修復前の状態に戻すことのできる、可逆性のある方法です。資料の修復は、展示物としての資料を美しく整えるというためだけに行われるものではありません。負荷のかかる状態を修正して資料を維持するという意味もあります。

日記に向き合い翻刻を進めてきた先人にまだまだ遠く及びませんが、当館でも調査研究を進め展示を通じてその成果を皆様にお伝えしていきたいと考えております。

(学芸員・寺西 明子^{てらにし あきこ})

参考文献

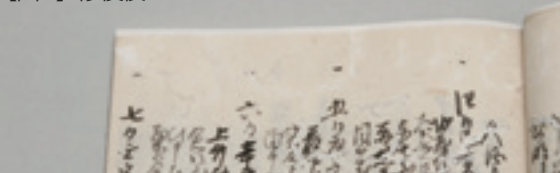
- ・白石通子・小林博子編、鈴木藤助日記研究会編『武蔵国都筑郡鈴木藤助日記』一～六、2002～2010年
- ・井上攻「研究余録 幕末維新时期の農村日記活用－武州橘樹郡長尾村鈴木藤助日記の個性から－」『日本歴史』第760号、2011年

※修復写真提供：TRCC 東京修復保存センター

【図2】修復前



【図3】修復後

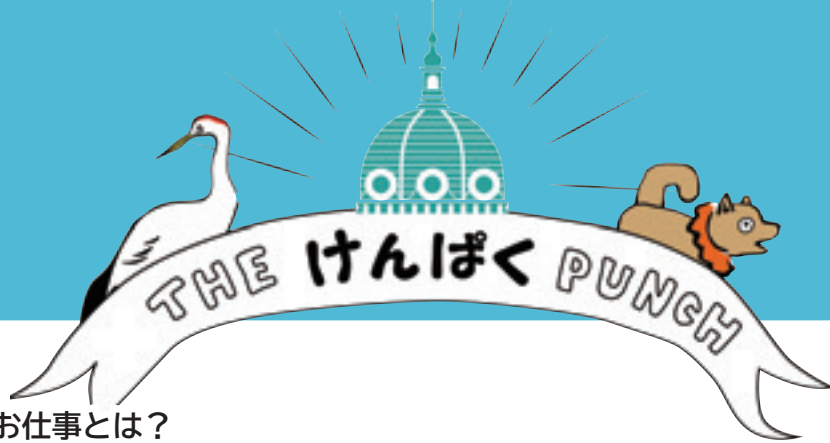


【図4】繕い



【図5】リーフキャストイング





館長のお仕事とは？



博物館や美術館の長と言えば「館長」。読者の皆さんは、はたして館長の仕事って何をするのかご存知ですか？個性豊かな博物館を引っ張る館長は、館によって個性も様々なのではないのでしょうか。はたして、県博の館長やいかに。

* * * * *

パンチの守 (以下パ) : 今日には館長室にお邪魔しておりますぞ。望月館長、今日もお疲れ様です（上司なので普段の口調をひっこめている営業部長）。

望月館長 (以下望) : いやいや、普通に話してくれて構わないですよ、営業部長。

パ : そうかろう？ならば遠慮はすまい！ワターシもこの館に長く居ながら情けないが、実は館長の仕事が多様なものなのか恥ずかしながら謎でな。今日はそのところをよくよく聞いてみようと思ったわけじゃ。普段はこの館長室にいることが多いのかのう？どんな仕事をしとるんじゃ？心がけていることも教えて欲しいのう。

望 : 普段は館長室で、書類の決裁や会議などを行っていることが多いかなあ。その他に県の博物館協会の会長なども務めているので、対外的な仕事も結構多いんだよ。来館者に来てよかったと満足してもらえる博物館、そしてそのために学芸員をはじめ館の職員が力を発揮

できる環境をつくることを、まずは第一に心がけて仕事をしているよ。

パ : ほうほう、そんなことをしておったんじゃないなあ。この部屋の書類の量を見るに、館長ともなると、回ってくる書類の量はハンパなさそうじゃ…。とはいえ館長の仕事は自分で色々決められるし楽しいものなのかのう？それともやっぱり大変なものなのかのう。

望 : 館長はやはり責任の重い役職だからね。歴史あるこの博物館やコレクションをどのように未来に伝えていくか、結構なプレッシャーなんだ。いろいろな課題に対して、どのように対処するか判断を迫られる時もあるしね。でも、仕事を通して多くの人や、様々な資料と出会えた時はやっぱり一番楽しいかな。

パ : それは苦勞が偲ばれるお話じゃなあ。ワターシも館の看板としてのプレッシャーはあるのでよくよくわかるぞ！館長はこれまでずっと学芸員として特に川崎をフィールドに歴史の調査・研究、展示をしてきたわけじゃが、その時と館長になってからはやはり仕事は大きく変わるのかのう？

望 : 現場に出る回数は随分減ったなあ。地域に出て調査をしたり、また自ら考えて展示を構築し、実現させていく、そんな学芸員としての醍醐味を味わえる機会が少なくなったことは残念だね。でも、まだまだやりたいことは、これでもたくさんあるんだよ。今年度は県博の行事でも「館長トーク」を実施する予定もあるんだ。

パ : なんと、やる気満々じゃの！ワターシも負けられんのう！

* * * * *

館長の「やりたいこと」、どうぞ皆様お楽しみに！
行事の詳細はHPをぜひチェックしてみてくださいね。

(館長・望月 もちつき 一樹 / 非常勤学芸員・市野 いちの えつこ 悦子)

